

NPO パートナースhip協力プログラム 事業終了報告書

団体名 「小さな Cove」プロジェクト
代表者名 代表 大畑 佐知

1. 事業名

「小さな Cove」を通じた能登・石川の集い場づくり@金沢

2. 事業カテゴリー

令和 6 年能登半島地震

3. 事業期間

2024 年 3 月 21 日 ～ 2024 年 9 月 30 日 (194 日間)

4. 契約金額

2,500,000 円 (総事業費 3,290,000 円)

5. 担当者名

大畑 佐知

6. 事業目的

能登半島地震により、2 次避難を余儀なくされた方々同士が集う「場」、元から暮らす方々と集う「場」をつくることを目的とする。

7. 事業の成果

「小さな Cove」、「出張小さな Cove」合わせて、延べ 1,042 名の来場があり、二次避難者同士や元から住む方が集う場づくりという目的に合致した効果が得られた。

具体的なエピソードとして、ひとりで来た金沢在住の能登出身の方が、金沢で能登を感じられる場所として気に入ってください、数日後能登のお友達を連れてきた。その後も次々にお友達を連れてくるなど、この場を通して、能登の方たち同士がつながる場として機能していると実感した。

また、当初想定していた避難者同士のつながりだけでなく、金沢に住む方以外に、元々の cove に来ていた方や支援にあたる方なども訪れ、多様な方の居場所であり、つながりが生まれた。

二次避難者や広域避難者は、街に溶け込むなかで、自分自身がある種異物である感覚や、自分の居場所はここではないという感覚に苦しむという話を避難者が語っており、大畑自身も金沢で過ごす中で同じように感じていた。このプロジェクトはただ支援をするのではなく、同じ避難者である大畑がもともと奥能登で営んでいた店がベースにあり、ともに想いを馳せたり、同じような苦しみを共有できるという、従来の支援とは違ったかたちでの居場所づくりだったからこそ、奥能登から避難する方にもそうでない方にも居心地のよい場所づくりが行えたと実感している。また、多様なかたとのつながりが生まれたことで、事業期間終了後も、こうした場づくりが続けられることが成果である。そして、プロジェクト期間に店舗再建のクラファンの実施や、Cove 自体がいつか珠洲に戻るという決意を固められたことも成果の一つである。

8. 事業種別 (コンポーネント) ごとの成果

(1) コンポーネント① 避難者が安心できる集い場づくり

■実績/成果

・こみんぐるが運営する宿泊施設「旅音」での開催や、出張小さな Cove の開催を合わせて、延べ 1,042 名が来場。

月ごとの来場者数は下記の通り (※6 月は拠点である旅音の空調故障により、OPEN 日が少なかった。)

4 月 25 名 / 5 月 284 名 / 6 月 19 名 / 7 月 213 名 / 8 月 233 名 / 9 月 268 名

・事業開始した 4 月は仕込みや環境整備もあり、開催できる日が少なかったものの、途中から仕込みをしながらの対応をする日を増やすなど、徐々に増やしていき、事業終盤は月 10 日程度来場者対応が行える日を作れた。回を追うごとに来場者が定着し、楽しみにしてくれていることが伝わってきた。

- ・広報は Instagram での発信のみにとどまったが、計 24 回の情報発信をおこなった。
- ・小さな Cove プロジェクト進行中に、店舗再建に向けたクラウドファンディングを実施。515 万円まで寄付が集まった。小さな Cove の取り組みを行うことで、店舗再建へ応援していただける方も増えたと感じている。
- ・カウンターだけの対応にとどまらず、大きなテーブルを活用したことで、来場された方同士がテーブルを囲み、みんなで話をしており、意図した場づくりにつながった。
- ・県外から来られた方は今後も能登に関わっていきたいと考えており、このプロジェクトで生まれたつながりが、これからの活動へのとっかかりになることができたと感じている。
- ・水害後に集まった能登の人たちは、黙ってずっとそばにいと、ようやくぼつりぼつり話をしてくれるようになり、みんなで気持ちを共有できた。二次避難で故郷の外に出た人の「居場所」、「気持ちの置き所」になれた。能登の状況がわからず不安、でも、ひとりにはなりたくない時、ここにすれば能登の人がいるという安心感をつくることができた。
- ・来場者に自分（大畑）も救われたと感じた。提供する、されるという一方的な支援の関係ではなく、提供しているようで、している側も救われる、被災当事者同士だからこその場づくりができた。

9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

- ・能登から金沢への避難者と同じように、能登で暮らしお店を営んでいたという立場であったことが、場に来るハードルを下げられたように感じられ、災害前から知り合いではなくても、同じ土地で暮らしていたものが場を作るということの効果の大きさを実感した。
- ・また、もともとお店をやっていたからこそ、この場にアクセスし、居場所と感じてもらえた方もいた。
- ・元々商売として飲食物を提供していたため、大事なのは場であり、飲食物などのクオリティではないというアドバイスもいただいたが、納得のいくものを出せずに場を開くということが難しかった。
- ・二次避難者は金沢の街で元々暮らしていた人にまぎれてしまっているので、どこか特定の場所で広報をすれば届くというものでもなかったため、SNS 以外の広報が難しかった。

10. 協力体制の構築

株式会社こみんぐる：4 月～7 月の期間で開催場所、仕込み場所の提供いただく。

また、株式会社こみんぐるは金沢市内を中心に宿泊施設を運営しており、能登からの避難者を受け入れていたため、小さな cove プロジェクトを始める際は、運営、広報ともにご協力いただくことができた。

NPO 法人綴る：7 月～9 月の期間で開催場所、仕込み場所を提供いただく。

NPO 法人綴るは、金沢を拠点に多様な職種に関わる人の集まりのため、金沢市内でのネットワークの構築につながった。10 月以降の NPO 法人綴る主催のイベントに関わり、今後出張 Cove での協力も検討されている。

舟あそび：出張小さな Cove 開催の際に協力

珠洲でギャラリーを運営している舟遊びは、地震の被害ため 2024 年は金沢で展示企画を行っており、その展示の傍らで、出張「小さな cove」を開催した。ともに珠洲に拠点を持っていたため、能登からの避難者にとっても安心して来場できる、能登の話ができる場をつくることができた。また、舟あそびのつながりで、珠洲で開催するイベントにも出店することができ、珠洲で暮らす方々とも話をする機会ができ、珠洲市内で小さな Cove の取り組みの認知度が上がった。

11. Civic Force との協働について

過去の災害でも、二次避難者や広域避難者への支援の必要性は叫ばれながらも、どうしても支援から零れ落ちるケースが多く、能登半島地震でも発災当初から 1～3 ヶ月ほどの期間は二次避難者への支援は展開されていたが、徐々に避難箇所の分散や、各地で仮住まいを見つけていき、支援は手薄となっていく。具体的な支援対象者へのアプローチや効果的な事業の実施が手探りななかで、事業開始に向けた相談や、状況の変化にともなう事業実施の方法の転換など、柔軟に事業が行えたことで、奥能登から避難してきた方たちが落ち着いてすごせる居場所づくりへとつながった。